

関美能留氏インタビュー

演劇を続ける。

(聞き手・構成：松本和也＋後藤隆基)

◇第4回 稽古をしながら読む『熱帯樹』◇

三島由紀夫の言葉／肉体

—— 三島由紀夫をレパトリーの1つとして
公演をしてきた三条会が、
今回、2008年12月のアトリエ公演（『弱法師』）以来
三島をとりあげるといっていますが、
長らく演劇・演出という立場から三島を読んできて、
どこに持続的な関心のポイントがあるのでしょうか？

関 僕がたぶんずっとやってきたこととしては、
「文学に肉体を乗ったら
なんか変なことになっちゃったよ」
ということだと思います。
いろいろな戯曲を上演してきましたが、
三島由紀夫の戯曲がいちばん「変なことになっちゃった」
ということになる気がします。
それは、なぜだろう。

ボディビルで鍛えた肉体というのは
実用的でないからかもしれません。
農業や土方などで、
鍛えた肉体ではないという意味です。

僕が、俳優にとって求めている肉体も、
生活にとって実用的でない肉体なのだと思います。
なので、実用的でない俳優の肉体が
三島由紀夫さんの文学に乗ったときに
なんか変なことになっているのが、
僕としてはおもしろく感じていることだと思います。

—— 三島由紀夫が、演劇化した際（肉体を乗せた際）
いちばん「変」に感じられたということですが、
関さんはこれまで、ギリシャ悲劇など、
地理的にも時代的にも、
三島より隔たった戯曲を上演してきたはずですが。
にもかかわらず、なぜ三島の戯曲が
いちばん「変」に感じられるのでしょうか？

関 様々な戯曲を上演してきましたが、
ふつうは、翻訳家なり作家なりが
人間に喋らせることを目的に書かれたものが
当たり前だと思います。
外国人だったり、戦時中だったり、
私たちと距離を感じるものもあったのですが、
「文体」においては
そんなに距離を感じるものはありませんでした。
三島由紀夫の「文体」は
人間が喋る「文体」ではない感じがします。
舞台化した時に「文体」と「肉体」の差が
顕著に現れるのではないのでしょうか。
これは観てもらえないと
わからないところではありますが。

『熱帯樹』 稽古の過程で

—— 稽古初期の段階では、
『熱帯樹』の読み方（漢字の読み方）などをはじめ、
違和感を取り出しつつ、探っている、

というようなお話でしたが〔#1〕、
ちょうど公演一か月前の現在、
合宿〔#2〕も予定されているそうですが、
『熱帯樹』を、現在の三条会メンバーで
上演することを念頭に、
稽古の感触についてお聞かせください。

関 とくに現在の社会にとってわかりやすく
三島由紀夫さんの戯曲を上演することが
必要なことだとは思えません。
でも、人は、誰しも寂しいものかもしれませんが、
三島由紀夫さんから寂しさをことさら感じます。
僕は社会にとって必要な演劇や
人生を楽しく謳歌しているような演劇を見ると
客席で寂しさを感じます。
人に寂しさを感じさせない演劇って
なんだろうと考えています。
劇団として、そういうことを考えながら
明日からの合宿に望めればいいなと思っています。
タイトルの「熱帯樹」は、
寂しさを感じさせない象徴なのかもしれない
と思っています。

—— 合宿はいかがでしたか？
新たな「気づき」などあればお聞きしたいのですが。

関 すっかり合宿で風邪をひいてしまいました。
ちょっと肉体的に無理をしてしまったのだと思います。
合宿中にしていたことは、
俳優に、作家が書いたセリフに対して
発語の根拠を示したり、
私がつける段取りに対して、
行動の根拠を示したり、
そういう作業をしていたので、
とくに目新しいことはありませんでした。

『熱帯樹』の演劇的解釈

—— 『熱帯樹』の内容／解釈についてお聞きします。

チランには

「家族の話をするの」とありますが、

家族劇というよりは

「話」自体に重きが置かれた会話劇、もっと言えば、言葉のための言葉が連なった劇に見えます。

他方、登場人物たちは病気の郁子をはじめ、

身体に何かしら弱さ（老いなど）を抱えている。

さらに、家族の心理劇だという見方を重ねると、

『熱帯樹』においては、言葉 - 心 - 身体が

非常に奇妙なバランスで成立している作品かと思います。

演出家としては、『熱帯樹』解釈は

どのあたりがポイントにみえているのでしょうか。

関 稽古をしながら気づいた台本解釈としては、

オープニングに郁子が、

小鳥を殺す

と宣言していることです。

つまり、この話は、

家族同士が殺すことを話している話ではなくて、

郁子が小鳥を殺す話なのではないかと発見しました。

読んでみると小鳥の存在が消えてしまうのですが、

鳥を視覚化して、

小鳥がいつどのようにして

いつ死ぬのかにスリルを持たせることが、

読んだだけではわからない、

演劇にしなければできないことなのではないのでしょうか。

—— 解釈について、合宿の際に気になった点などありますか。

関 とくに目新しいことはないと言いましたが、

ただ、登場人物の「欲望」に関しては、
読めば読むほど興味はわきます。
あの人たちは、結局何をしたいのか
全然わかりません。
最後まで探っていこうと思います。

—— 登場人物の（何がしたいのかわからない）「欲望」に
興味をお持ちとのことですが、
殺意など、言葉としては書かれていますよね。
すると、関さんの言う
「わからなさ」とは
どのようなものなのでしょうか？

関 そうですね。
欲望は書かれていますね。
私の感覚としては、登場人物が
「生きたい」のか
「死にたい」のかわからないということです。
これをどちらかに決めてしまうのか、
「生きたくもあり死にたくもある」とするのは、
私にとって大きな決断だと思っています。

—— もう少し、『熱帯樹』解釈について
お聞きしたいのですが、
郁子の「病気」と、その捉え方と、
劇中の人間関係における病気の意義を
どのようにお考えでしょうか？

関 僕は、郁子が発語する「病気」は、
いわゆる「病気」を意味しているものではない
と、捉えて上演したいと考えています。

たとえば、小鳥の鳴き声が
「ビョーキ」だとしたらどうでしょう。
意味のなかった鳴き声が、

時間とともに言葉になっていく。

「熱帯樹」「病気」が進んでいくとともに、
小鳥が発する音も言葉になっていく感じが
いいなと今は思っています。

- 人物および台詞の配置について、
原則としては
対等な立場の登場人物による対話が
展開されていくのですが、
秘密（の保持）がアドバンテージとなって、
時に均衡を破ってヘゲモニーを奪うような
メタレベルのセリフがあるかと思います。
そのあたり、演出上の工夫などあれば教えてください。

関 えっと、ここでいう
「メタレベルのセリフ」の意味が捉えにくいのですが、
私は演出家なので、
音響や小道具や照明によって、
ヘゲモニーを奪うことはできます。
今回は「熱帯樹」というタイトルなので、
「水」と「太陽」を用意しましょうか。
「水」は単純に飲みながら
セリフを言うことはできませんし、
「太陽」はセリフに時間制限を生み出しますし、
ひよっとしたら温度によって
セリフが変化していくかもしれません。
どのタイミングで
「太陽」と「水」を俳優に与えるかは
「セリフ」きっかけではあるとは思いますが、
それが「メタレベルのセリフ」かどうかは
私にはわかりかねます。
感覚でしかないです。

- わかりにくくてすみません。
具体例を挙げます。

第3幕の第3場～第5場にかけて、
郁子 - 勇の対等なセリフに、
決定的な秘密をもった律子のセリフが
かぶさっていくところです。
ただし、ここでは勇も同じ秘密を知っているので、
作中人物たちの情報量と
パフォーマンス（言動）の戦略的（？）なあり方が、
気になっていたのですが、
いかがでしょうか。

関 そうですね。
第3幕のところの郁子、勇からの
律子の長ゼリフの流れは、
第1幕第3場の3人のシーンに
ヒントが隠れていると思っています。
第1幕第3場の3人と
第3幕第5場のセリフの違いを
考えてみようというのと、
単純に第3幕第5場で
勇と郁子は一言もセリフを発さないことも興味深いです。
その理由を俳優に肉体化させようとは思っています。
なぜ、言葉を発さないのか。

—— 「私の目に見えなければ、つまり
そんなものはありはしないんです。」（第1幕第5場）
——わかりやすく、本作のエッセンス（の1つ）を
言い当てたかのような信子のセリフは、
『熱帯樹』を演劇化する際の
困難を言いあてているようにも感じられますが、
関さんはどのように捉えていますか。

関 このセリフで、信子さんは、
自分自身を存在しないものと考えている
と読むことができると思います。
人は、自分自身を見ることができないわけですから。

私は、今のところ、ふつうに
自分自身を存在するものだと思っているので、
私の目に見えないものでも
そんなものはそこにあると考えたいです。
そこに樹が見えなくても
樹が生えていることにするなんて楽勝ですよ。
乞うご期待。

新生三条会の挑戦／原点

—— 新メンバーで初となる
三条会本公演だと思っただけですが、
数か月の『熱帯樹』の稽古を通じて
集団としてどのような変化があったか。
差し障りのない範囲で教えてください。

関 新メンバーになって、
旧メンバーの時との明らかな違いは、
私が全然怒らないということです。
怒っていたとき、なんで怒っていたのかを考えると、
俳優同士のいがみ合いが嫌で、
私が怒っていれば、
嫌われるターゲットが私に向かうので、
それでいいやと思っていたのです。
今は、私自身が嫌われたくない
と思っているのかもしれませんが。
舞台においては、
演出家は神様みたいなもの
(偉いという意味ではありません)
なので、いつも怒ってる神様が居る舞台と、
嫌われたくないと思ってる神様が居る舞台では
質感が違うのではないかと考えています。
より人間の愚かさが
にじみ出る舞台になればいいなと思っています。

—— 今回の三条会公演『熱帯樹』について、
意気込みを一言お願いします。

関 これはいつでも変わりありません。
劇団として、最新作が最高傑作です！
なんといったって構想 18 年！

*今回は、関美能留氏への連続インタビュー「演劇を続ける。」の特別編として、メール・インタビュー（2015年8月28日～9月11日@東京／松本）を再構成しました。

#1：関美能留氏インタビュー「演劇を続ける。◇第3回 三島由紀夫・角川映画・『熱帯樹』◇」参照。

#2：三条会は、『熱帯樹』公演に先立ち、8月31日～9月2日の日程で、百景社アトリ（土浦市）で合宿を行った。